

近代詩の成立と展開

海外詩の影響を中心に

〔増補新版〕



中島健蔵
矢野峰人
監修

精 堂 選 書

近代詩の成立と展開

—海外詩の影響を中心に—

〔増補新版〕

日本比較文学会 中島健蔵 監修
矢野峰人



有 精 堂

有精堂選書

近代詩の成立と展開

—海外詩の影響を中心に—

昭和四十四年十一月十日
昭和四十五年十二月三十日 再版発行

日本比較文学会

監修者

中島健蔵
矢野峰人

発行者

山崎誠

印刷者

山之内印刷株式会社

発行所

有精堂出版株式会社

東京都千代田区神保町一―三九
振替口座 東京四〇六八四番

郵便番号 一〇一

◇乱丁・落丁はおとりかえいたします。

3392-550508-8610

新版のために

本書が「比較文学研究2」として刊行されてから十三年すぎた。再刊を望まれながら諸種の事情がそれを許さなかったが、今回有精堂から装を新たに刊行されることになった。

本文については誤植訂正にとどめたが「研究文献目録」は主要なものを補遺の形で追加した。「日本比較文学会の活動記録」は新版の性格を考え省略した。なお、あとがきは編纂の事情を明らかにするため残したが、執筆者の勤務先などは現在によって改めてある。本書が再び多くの読者に迎えられるよう願っている。

昭和四十四年十月

日本比較文学会

目次

近代詩と訳詩……………	九
近代詩と訳詩(一)——訳詩集の歴史的意義(一〇)——影響の問題(一一)——異質的と同質的(一二)	
*	
新体詩抄——概説……………	一六
明治維新後の社会と思想(一六)——「詩抄」の思想的背景(一七)——「詩抄」の内容(二二)——近代詩発展への役割(二七)	
原詩と原詩人について……………	二六
『新体詩抄』の詩論……………	三七
詩形に関する考察(三七)——俗語の使用と韻律(三九)——ジャンルの問題(四〇)——叙事詩への志向(四二)	
新体詩抄の影響……………	四四
詩形を模倣した後続作品(四四)——思想・感情の新らしさ(四六)——詩歌論への反省の端緒(五〇)	

於母影——概説……………四

近代詩史上の位置(四)——所収詩人(五)——翻譯の態度・方針(六)——訳者の問題(六)——
市村説・亀田説(七)——小金井説(五)

原詩と原詩人について……………六

「わが星」について……………六

於母影の影響……………七

反響(七)——依田学海の批評(七)——文学青年側の声(七)——バイロン熱(七)——有明の回
想(七)——泣菫・有明・藤村への影響(七)——「椰子の実」への影響の有無(七)——柳田国
男説(七)——「おさよ」(七)——『抒情詩』一派への影響(七)

於母影の語彙とスタイル……………八

外形美の移植(八)——「意」訳(八)——「韻」訳(八)——「句」訳(八)——「調」訳(八)——
語彙(八)

*

海潮音——概説附牧羊神……………八

詩史的意義(八)——象徴詩(八)——影響の原因(九)——訳者の態度・『みをつくし』との関
係(九)——翻譯の時期と原作者(九)——翻譯ぶり(九)——『牧羊神』編訳の動機(九)

原詩人について……………一〇

海潮音の影響……………110

「パンの会」同人の回想(110)―有明(111)―泣菫(112)―白秋(113)―本太郎(114)―秀雄(115)―啄木(116)―露風(117)

海潮音の象徴主義……………118

はしがき(118)―上田敏のフランス象徴詩紹介(119)―朦朧の論議と象徴論の発展(120)―影響及び批判(121)

初出誌と訳業苦心のあと……………124

*

珊瑚集―概説……………129

『珊瑚集』の地位(129)―書誌的解説(130)―初出詩と逸詩(131)―荷風とフランス近代詩(132)―『海潮音』との相違(133)―『珊瑚集』の推敲と当時の批評(134)―珊瑚集の影響(135)

原詩と原詩人について……………135

珊瑚集の影響―露風を中心として……………139

研究の概観(139)―ヴェルレーヌの影響(140)―ボードレール、ゴーチエ等の影響(141)―影響の時期と中心点(142)

『珊瑚集』と初期の荷風文学 一九九

荷風と仏蘭西象徵派(一六〇)―初期作品とボオドレエル(一七〇)―ヴェルレエヌと荷風の悲哀(一七五)―ランボオの“Sensation”(一七五)―レニエへの傾倒(一七六)―ノアイユ夫人の片影(一八〇)

初出誌とその翻訳表現 一八二

初出誌一覧(一八二)―初出時の訳と初版『珊瑚集』(一八三)

*

作品の研究と鑑賞

グレイ氏墳上感懷の詩	トーマス・グレイ	新体詩抄	一九三
ミニヨンの歌	ゲーテ	於母影	一九七
落葉	ボオル・ヴェルレーヌ	海潮音	二〇三
信天翁	シャルル・ボードレエル	海潮音	二〇六
春の朝	ロバート・ブラウニング	海潮音	二一〇
白楊	テオドル・オーバネル	海潮音	二一三
無題	ボオル・ヴェルレーヌ	珊瑚集	二一六
仏蘭西の小都会	アンリイ・ド・レニエ	珊瑚集	二一八

新体詩運動と訳詩との問題……………	二三五
＊	
研究文献目録……………	二三一
研究文献目録補遺……………	二四四
あとがき……………	二五二

- ・分担執筆者の意見に従って、かなづかいは原文のままとした。
- ・雑誌・単行書名には『』、題名・引用文等には「」を使って区別した。
- ・年号、月を例えば（明一五・一）としたのは、明治十五年一月、（同・一二）は同年十二月のことである。
- ・引用文の用字用語は、原則として原作の文章のままにしておいた。
- ・引用の詩を頁数の関係で上下二段に印刷したものは、上段の*印から下段の*印に続く。原詩が二段に書かれ上下交互に読むものには*印をつけてない。

近代詩と訳詩

日本の近代詩が西詩の影響を受けて發生・成長したものである事は、今や周知の事実である。ただ、その影響たるや、我詩人が直接原詩（この中には英訳をも含む）との接觸により与へられたものと、翻譯（此処では邦訳に限る）を通して与へられたものと、少くともこの二つの別ある事を忘れてはならない。そして、原典が英語で書かれて居る場合には、明治前半期に於ても、英語を解し得る人が比較的多かった關係上、「翻譯」といふ媒介を通さないで、直接原作に親炙する事が出来たが、大陸諸国の詩に至っては、明治二十年代から三十年代にかけて、独逸詩は仮に例外とするも、これを原語で読む人は皆無に近かったと言つても誇張ではあるまい。殊に、フランスの所謂近代詩を原語によつて理解・鑑賞し得る人は無かつたと言つてよい。三十八年十月に出た『海潮音』が、近代詩の聖典の如く尊重愛読され、詩壇に深甚な影響を与へたのも、名のみ久しく伝へられて実作に接する事を得なかつた人々に対し、巧妙なる翻譯によつて原作の趣致・風格を能く髣髴させたからである。

然し、今茲で問題として居るのは、わが近代詩の發達に及ぼせる西詩の影響ではなく、近代詩と訳詩との關係如何といふ事である。明治の初から大正にかけて訳出された西詩は無数に有り、それを集めた冊子の数も枚挙に遑が無い。然し、このやうな場合に、われわれが特に重視し、取捨選択の標準とすべきは、誰が何時何を訳出して居るといふ事実の探索よりも、如何なる訳詩がわが近代詩發達の上に寄与して居るかといふ事であるべきで、この歴史的意義を有せざるものの探究は、單なる好事家

的乃至考古学的興味を満足させる事以上には出ないのを常とするから、少くとも今の場合、不問に附すのを可とする。それは、移入史の一項目とはなり得ても、一つのジャンルの発達を辿る上には何等の価値をも有し得ないであらう。例へば、バイロンの翻譯が盛に出たのは三十年代の後半に入ってからのものであるが、而も彼が我詩人のみならず、青少年に深い影響を与へ、一部識者をして響盪せしめたのは、二十年代の事であつた。また、ハイネ、ゲーテ、シルレル等の訳詩集が相次いで現れたのは三十年代の事で、中にも尾上柴舟(さいじふ)「歌人・二六五」訳の『ハイネの詩』の如きは特に愛読されたらしいが、而もこれが日本詩の進路を多少でも左右したとは到底考へられない。ホイットマンの詩の如きも、二十年代の夏目漱石(しゅせき)「小説家、英文学者・二六五—二七〇」三十年代の高山樗牛(しゅうぶ)「評論家、思想家・二七〇—二七五」の紹介は別とするも、四十年代の初葉、岩野泡鳴(はうめい)「小説家、評論家、詩人・二八三—二八五」が盛に『草の葉』から訳出したにもかかはらず、まだ模倣家・追隨者を出すに至らなかつた。彼の名が一般に聞こえ、その影響を蒙る者が現れ初めたのは、大正に入つてデモクラシイの叫び声がかまびすしくなつてからの事である。そして、その詩集の翻譯も殆ど時を同じうして二三出るには出たが、明かにその影響を受けて居ると思はれるのは、單にそれら当の訳者に止まり、わが詩壇がこれらの翻譯によつて多少でも動かされたとは考へられない。ホイットマンに興味を感じる程の人ならば、翻譯によらず、直接原典を繙いたであらう。

若しもわれわれがこのやうに、「歴史的意義」といふ観点に立つて選択するならば、結局われわれの手に残る訳詩集としては、明治年間に出たものの中では『新体詩抄』『於母影』『海潮音』の三冊を、大正年間に出たものでは『珊瑚集』『牧羊神』の二冊を数ふるに過ぎないであらう。そして、後の二冊は大正改元後に出版されては居るものの、その内容を構成する詩篇は、『珊瑚集』にあつては大

正二年二月に公にされたサマンの詩一篇を除く外全部、明治年間に発表されて居り、『牧羊神』に収められて居る訳詩の最も新しいものも、大正二年一月発行の雑誌に掲載されて居るから、これら二大訳詩集は実質的には明治に属すると言っても大過あるまい。事実、これらの訳詩の多くは、それぞれ定期刊行物に発表された時に、直に詩壇に反響を喚び起し、青年詩人の新作にその影響の跡を印したのであった。荷風が四十二年九月の『スバル』に訳載したヱルレーヌの「夜の小鳥」は、露風が其年の暮に発表した「秋の夜の小鳥」を生めるが如きはその一例で、総じて『寂しき曙』（明四三刊）に収められて居る諸篇は、まだ『珊瑚集』にまとめられない時の荷風訳に負ふ所が甚だ多い。

私が今『珊瑚集』と『寂しき曙』との関係を持出したのは、単に、大正年間に出版された書物の影響が、これに先行する明治時代の著作に著しい影響を与へて居る事を例証するために外ならなかったのであるが、この一例は図らずも、ある作品は、それがまだ書冊に纏められない時にでも、相当深い影響を与へ得るものであるといふ事実を立証する事となった。然るに之に反し、同じ作品でも、それが書物の形を取り触目に容易なものとならない限り、全然世に知られないで終る事も亦少くない。否、むしろその方が多いのが世の常である。例へば、後『牧羊神』に収められたポール・フォールの「両替橋」が最初公にされたのは明治四十四年一月の雑誌『芸文』誌上であり、次いで多少の改訂を加へたものが詞華集『マンダラ』（大四・三）に収められ、更に、二三の改訂を施されたものが詞華集『鬱金草』（むぎくさ）（大四・五）に出た。この後の二詞華集に載った訳稿の孰れが早期に属するものか、発行年月にのみによつて断定する事は許されない。然し、最初のものは京都から出た學術雑誌に載つて居たため、一般読書子の眼に触る機会が無く、最後のものは大阪発行であつたため、同様に、中央詩壇に訴へる事が出来なかつたやうである。この名訳が偶々柳沢健の眼に入り、直に彼を動かしてその一

派により盛に模倣されるやうになったのは『マンダラ』が東雲堂から出版されてからの事である。

これは、作品の影響が、その本質的価値とは全然関係の無い、発表機関の性質といふ偶然的事情によつて左右されるものである事を示す一例であるが、同様の事は、その出現の時期に就いても言ひ得るであらう。つまり、或る作品の影響の有無とか深度とか結果の良否とかは、作品の価値よりも、寧ろこれを受容れる側の条件・態勢如何によつて支配される事が多い。従つて、本質的価値に富める作品が、適時に現れる時のみ、その影響は比較的速に、かつ良好なる結果を産むと言つて差支無い。『海潮音』の影響が速で、日本の詩歌を前例無き程変質せしめる事が出来たのは、真に優秀なるものが、転換を必要とせる時期に現れたからである。これに反し、『新体詩抄』が、当時の進歩的文学青年に影響を与へた事は、独歩・有明・晚翠等の回想によつて明であるにもかかはらず、その結果が急速に表面化しなかつたのは、本質的価値はさておき、当時の詩壇に之を受容れるだけの準備がまだとつて居なかつたためと言つてよく、同様の事は、『於母影』の場合にも言ひ得る。唯、これが本質的価値の点に於て『新体詩抄』と大に異つて居る事は、更めて説く迄も無い。

一体、或作品に対する反響が速に且大であるのは、読者の眼前に現れたものが、同質的であるため、理解・同感に容易である事に基づく場合と、それが異質的であるため、新奇性の故に歓迎される場合とがあり、一概に片づける事は出来ない。『海潮音』に例を取れば、「山のあなた」や「わすれなぐさ」は前者に属し、象徴派の諸作は後者に属する。而して、前者は日本文学の伝統に属するものの一面の継続・推進であるから、たとひ広く愛誦されても、其儘では日本詩歌の新生面打開の上にはさして寄与する所無く、新方向への展開と発達とを促したものが、後者である事は、否定出来ないであらう。

『於母影』にあつても、「笛の音」の如きものは、そのロマンティックな性格と、理解・共感に容易

な点とを以て大衆に直に訴へる力はある、邦詩發達の上からは重視する事を得ず、これに反し、「マンフレッド一節」や「ミニヨンの歌」などは、その内容または表現の新奇性の故に、具眼者の脳裡に深く影を落した事は想像に難くない。

このやうに、わが近代詩は、むしろ異質的なものの翻譯を通し、不斷に新しい刺激を与へられたり範例を示されたりする事によつて發達して來たのである。而も、訳者の態度・方針に至つては、必ずしも同一でない。前記訳詩集を例にとるならば、『新体詩抄』と『海潮音』（および『牧羊神』の訳者は、一世を指導し、少くとも新しい詩歌を我國に興さんとの意図を以て翻譯に着手して居るに對し、『珊瑚集』の訳者は、唯、自己中心に、おのが感興の赴くが儘に、その時その折に心を引かれた作品を邦語に移植するといふ態度に出、『於母影』の訳者は、恰もその中間に立つて、一つの実験を試みんとして居るものの如くに思はれる。而もその真意が、わが詩壇への寄与にあつた事は、主宰者たる鷗外の當時の文壇的地位および活動ぶりから見ても、否定出来ないであらう。

それでは、これら代表的訳詩集をはじめとし、單行本乃至定期刊行物に現れた訳詩は、如何なる点に於て、我が近代詩の發達に寄与したであらうか。

それは、一言以て蔽へば、日本人の感性に、新しい刺激を与へる事により、これを變質せしめ、漸次、意識内容を拡大・深化した事である。即ち、取材の方面に於て、動もすれば狹隘・單調に陥り詠嘆に墮しがちな伝統を打破して、新しい詩材を取入れる事によりこれを遙に複雑なものとし、内觀的な方向に向はしめたのである。そのため、一方に於ては心理的になるものもあれば、他方官能の開放に新しい愉樂を見出すものも現れるに至つた。

内容の變化は、必然的に表現上の新工夫を要求する。斯くて、時代を降るにつれ、其処には新しい

語彙(㊟)・語法並びに律格の發生が見られるやうになったが、「新しい語彙」の中には外国語が其儘移植される一方、形式の上では、スタンザ(節)を嚴守する定型詩と自由詩・散文詩が並び立ち、文語体と口語体とが併存し、はては、邦詩には未だ曾てなかった疑問符・感嘆符・省略記号の使用さへ試みられるに至ったのである。

(矢野峰人)